

## 優秀賞

# 絆——子供の言動——

岡山県 就実高等学校三年 赤井 加菜

私は、高校二年、三年の二年間、「新天地育児院」という施設へ行き、子供たちと触れ合うというボランティア活動に参加している。このボランティアは、学校で私が専攻しているコースだけによる活動で、たくさんの先輩方も参加し、代代受け継がれているものである。私はこの場で、子供達からたくさんの感動をもらった。

「新天地育児院」とは、親から虐待を受けていたり、やむを得ない理由で子供を育てられなくなったたり、親と死別したりと、家庭問題を多く抱えている子供たちを引き取り、世話をする施設である。親が存在する子供はやはり親元が一番良く、時々実家に帰っているらしいが、私たちが久しぶりに施設へ行くと、以前会った時にはなかったあざや傷が新しく出来ている子供が複数いた。おそらく、親から受けた暴力の跡であろう。しかし、子供たちは一切顔色を曇らせるところはなく、むしろいつもより笑っているように見えた。私はそんな子供たちの表情を見ると胸が痛くなった。

子供には、「反抗期」というものがある。もちろん、私にもあった。親のことが嫌いではないけれど、とにかく当時はとても邪魔に思えて、口答えをして逆らうばかりでした。けれども、私の両親は私を殴ることもなく、むしろ怒ることもなかった。しかし、この施設の子供たちは、親に歯向かってもないのに殴られ、蹴られ、怒鳴られている。それなのに、ただ親に会えたことが何よりも嬉しいようだ。私は、親に対して邪魔扱いをして逆らっていたことがとても恥ずかしくなった。親が側にいて私を支えてくれていることの幸せさに感謝するべきだと思った。

前回施設を訪れたとき、私は子供たちと一緒に

にビーズを作って遊んだ。自分のビーズ作りに夢中になっていると、一人の女の子が、

「その豚さんか可愛いね。」

と言ってくれた。とても可愛いとは思えない豚だったけど、子供に喜んでもらおうと思って作った豚だったのでとても嬉しかった。その女の子とまたビーズ作りを再開すると、遠くで遊んでいた男の子が突然暴れ出して、ビーズを入れていた箱を蹴飛ばしてしまった。危うく、私たちが作ったビーズは崩れなかったけれど、ビーズ自体が四方八方に飛び散ってしまった。私は、その男の子に物を蹴り飛ばしてはいけないことを注意しようとしたが、私が注意する前に一緒にいた女の子が注意してくれていた。女の子が男の子に言うていたことは、ほとんどが私が言おうとしていたことであった。男の子は数回反抗していたが、女の子の説得で納得したのか、突然静かになり落ち込んでいる様子だったので、私は一言、

「もうやったらだめだよ。」

と言って頭を撫でてあげると、男の子は大きくうなずいて笑い、また友達と遊び始めた。私はこの時、初めてこの施設の暖かさを感じた。家族でもないし、親戚でもないけれど、それ以上の関係を築けていて、単純にすごいと思えなかった。それほどこの施設のみんな、お互いの絆が深かった。今の二人はまるで姉と弟、あるいは母親と息子のようにも見えて面白かった反面、とても心が安らいだ。私は今までこの施設にいる子供達は、幼い時にあまり良くない環境の中で育ったために、言葉遣いや行動が悪く、この子供達の中で良い親はきつくないのだらうと思っていたが、この女の子の言動を見ると、

そうでもないのかもしれないと思った。育ちが悪く、何も教育されていないのなら、あのような言葉は出なかったと思う。施設内で教育されたことなのかどうかは、はっきりしないが、「子は親の背中を見て育つ」という言葉があるように、ほんの少し親元で育っていた間に、両親が話していた、もしくは言いつけていた言葉なのかもしれない。そう考えると、子の親に対する気持ちやどれだけ強いものなのかがよく分かった。

この施設での体験を通して、私は子供達に家族の大切さを教えてもらった。改めて、今私がいる環境がどれだけ恵まれているかを再認識した。家族の大切さを知ったことその他に、二年間を通して見続けてきた子供達の成長していく姿にも心を打たれた。少し見ないうちに背が伸びている子供や、苦手なことができるようになっていく子供、中でも歩けるようになっていた子供を見たときは我が子のように嬉しかった。私は将来、幼稚園教諭になりたいという夢を持っている。実際、幼稚園教諭になると悩み事や心配事が尽きないと思うけれど、高校二年間で体験したことを忘れず精一杯仕事に励み、園児から愛される素晴らしい先生になりたい。